

第3章 京都大学病院構内 AE12・AE13 区の発掘調査

千葉豊 森下章司

1 調査の経過

本調査区は、京都大学医学部附属病院構内の西南部に位置する（図版 1-192・198）。ここに、ウイルス研究所実験研究棟および医学部・遺伝子実験施設分子生物科学実験研究棟の新営が計画されたため、予定地全域の発掘調査をおこなった。なお調査区は、西半の AE12 区（192地点）と東半の AE13 区（198地点）の 2 区にわたるが、隣接地点であり、ここにまとめて報告する。調査面積は、総計で 1410.5 m² である。

調査区のある地は、元永元（1118）年に造営された白河上皇の院の御所「白河北殿」の北辺一帯にあたる。この周辺においては、1976・1977・1982年度に医療技術短期大学の校舎新営にともなう発掘調査がおこなわれており、古代から近世にいたる遺構・遺物が発見されている〔京大埋文研81a〕。この調査では、古代末に築かれた旧高野川系河川の護岸跡がみつかっており、今回の調査区一帯における遺跡の形成時期とその土地利用の変遷が問題となるところであった。

調査の結果、近世後半の畑作に関係する道、井戸、野壺などを発見したほか、近世の土師器と大量の陶磁器を得ることができた。この地一帯における地形環境の変遷や近世の土地利用のありさまを明らかにするうえで、また、近世後半の土師器、陶磁器の編年や流通を検討するうえで基礎資料とすることができるであろう。

2 層 位

現地表面の標高は 46.2 m 前後で、ほぼ平坦である。基本的な層位は、上より表土（第 1 層）、黒色土（第 2 層）、茶褐色砂礫（第 4 層）の順である（図 22）。黒色土は耕作土層で、近世後半の遺物を包含する。茶褐色砂礫は旧高野川系流路の堆積物。中世後半の土師器・青磁片を少量含むが、いずれも摩滅している。調査区東半の Y=1667 付近から西では茶褐色砂礫の上面が段をなし、黄褐色土（第 3 層）が 20 cm ほどの厚さで茶褐色土の上に堆積している。この段差は、調査区東半の北辺では、ほぼ南北方向に続き、面的な広がりがみとめられた。時代を特定できる遺物をほとんど含んでいないが、近世前半の開発などにかかわるものと推定している。

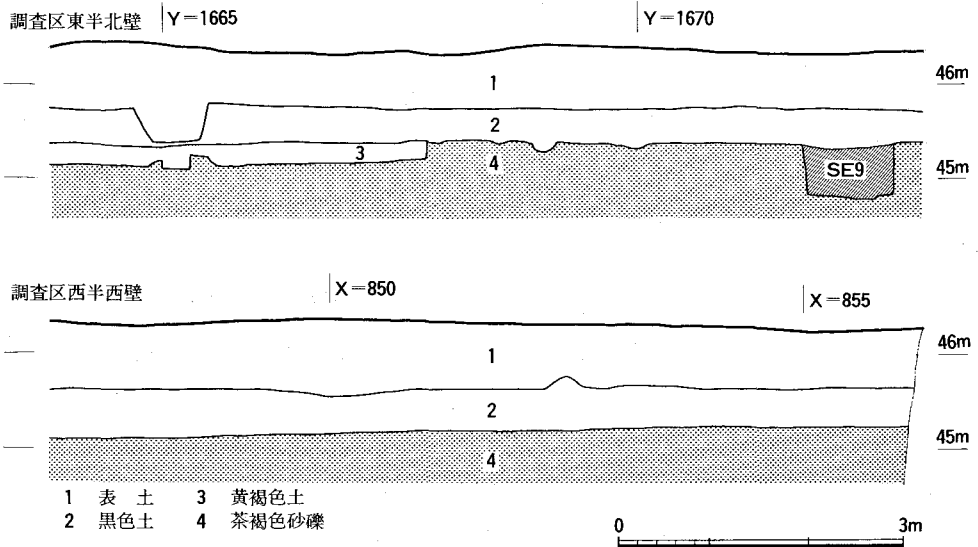


図22 調査区の層位 縮尺 1/80

3 遺 構

検出した遺構には、道、井戸、野壺、溝、柱穴、集石がある（図版13・14、図23～26）。いずれも近世後半の耕作に関連する遺構と考えられる。

道 SF1 は、調査区西半で検出した。幅は約 1 m と狭く、礫混じりの土を固めて作られた簡単な構造である。方位は、真北より東へ約 2° 度振れており、ほぼ南北方向に伸びる小道である。この道を挟んで井戸と野壺を多数検出した。井戸と野壺は、さらに調査区東半の北辺でも集中して発見された。井戸と野壺の並びからみて、調査区外に東西方向にのびる道の存在が推定できる。

井戸は、井戸側を石組で作ったものと井戸瓦を用いたものに大別できるが、後者は SE8 の 1 基のみである。水溜は、方形の木枠を利用した SE21 を除いて、すべて円形の木桶を用いている。井戸底の標高は、43.1 m から 44.1 m の間に分布する。

SE3, SE11, SE22 は、石組の最下段にやや細長くて大ぶりの石を縦置きにして用いている。SE22 は、ほぼ同じ位置で作り直しがおこなわれており、下部より前の井戸の石組を検出した。SE18 は、石組の石が小ぶりで、下部にゆくほど小さくなる。ほかの井戸が円形の掘形をもつものに対して、北側へ幅 0.6 m、長さ 0.8 m の張り出しをもつ点でも異質である。

遺 構

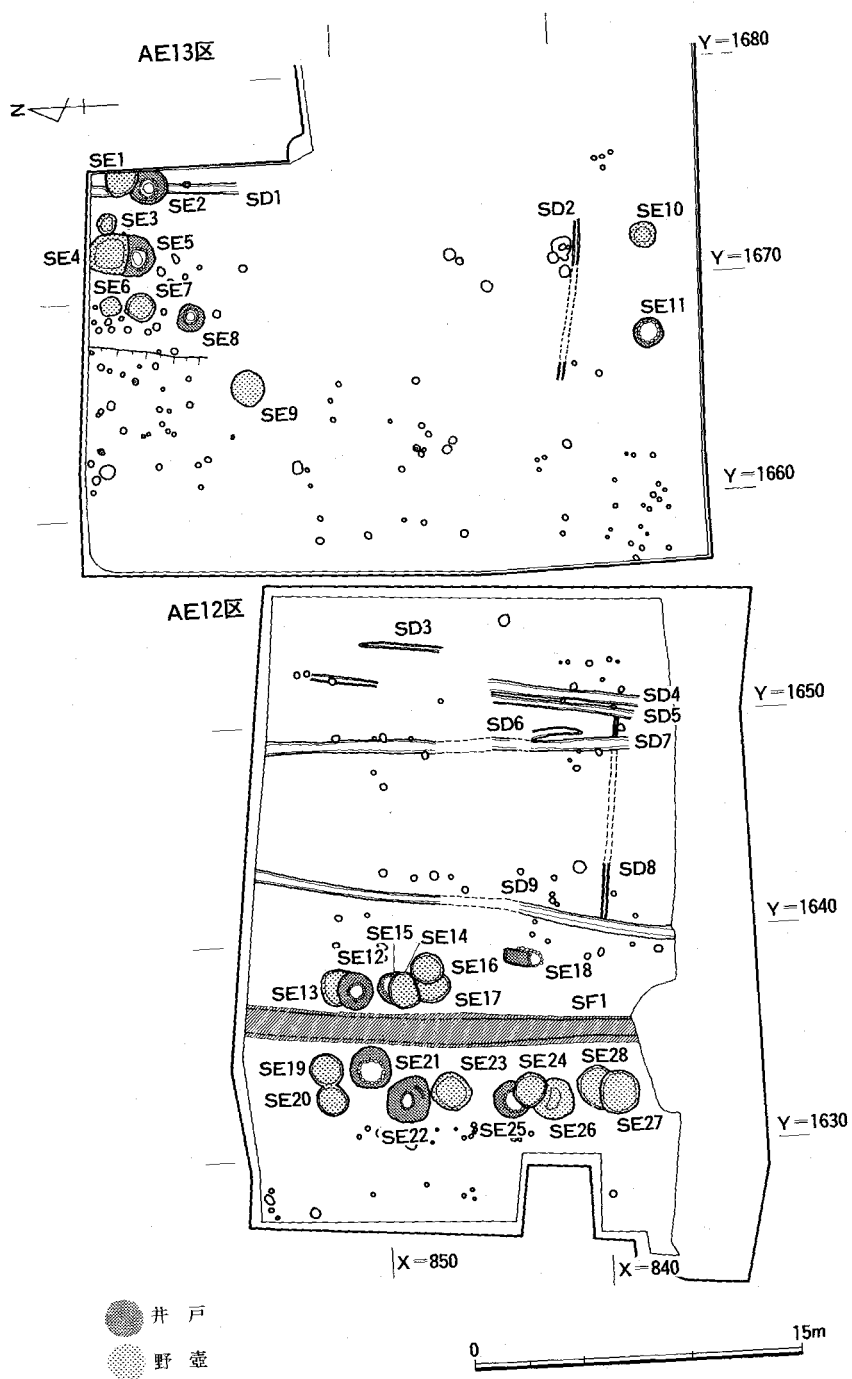


図23 近世の遺構 縮尺 1/350

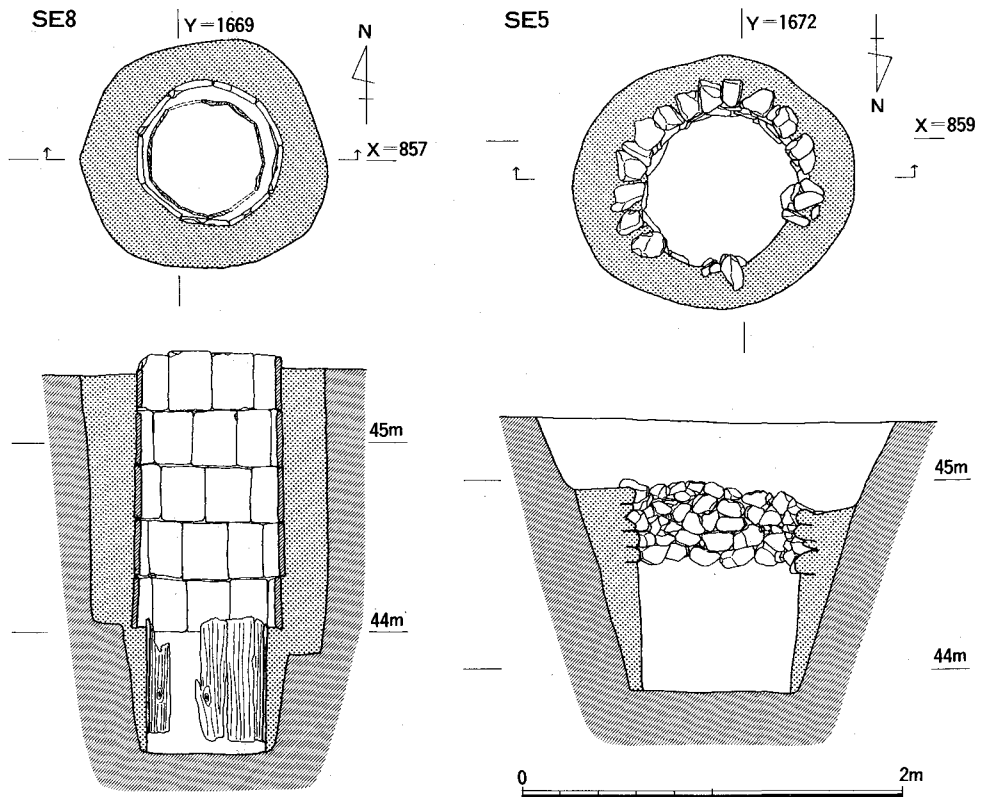


図24 井戸 SE8・SE5 縮尺 1/40

SE8 は、専用の井戸瓦を利用した井戸である。水溜に木桶を用い、その上に積み上げられた井戸瓦を5段分確認した。1段にはほぼ9枚の井戸瓦を並べている。下2段は、目地を揃えて置くのに対し、それより上は目地の位置をずらして置いている。井戸瓦は、縦30 cm、横26 cm、厚さ3 cm。多くは表裏平滑なものであるが、凸面に長さ5 cmの楔形の刻みを、八字状にいたものがある。すべりどめの役割を果たしたものと考えられるが2点のみである。

井戸の周囲より野壺を多数検出した。SE1・SE9・SE14・SE23は、漆喰製の野壺。SE9の埋土は表土と同じもので、ガラス製品などを含んでおり、近代以降まで用いられていたらしい。そのほかの野壺は、木製桶を用いたと想定される野壺である。SE16は、木桶の底板が残存していた。

井戸と野壺は組み合わせて耕作用に利用されたものと考えられる。SE1とSE2, SE4とSE5, SE8とSE6・SE7, SE12とSE14, SE15とSE16・SE17, SE21とSE19・SE20,

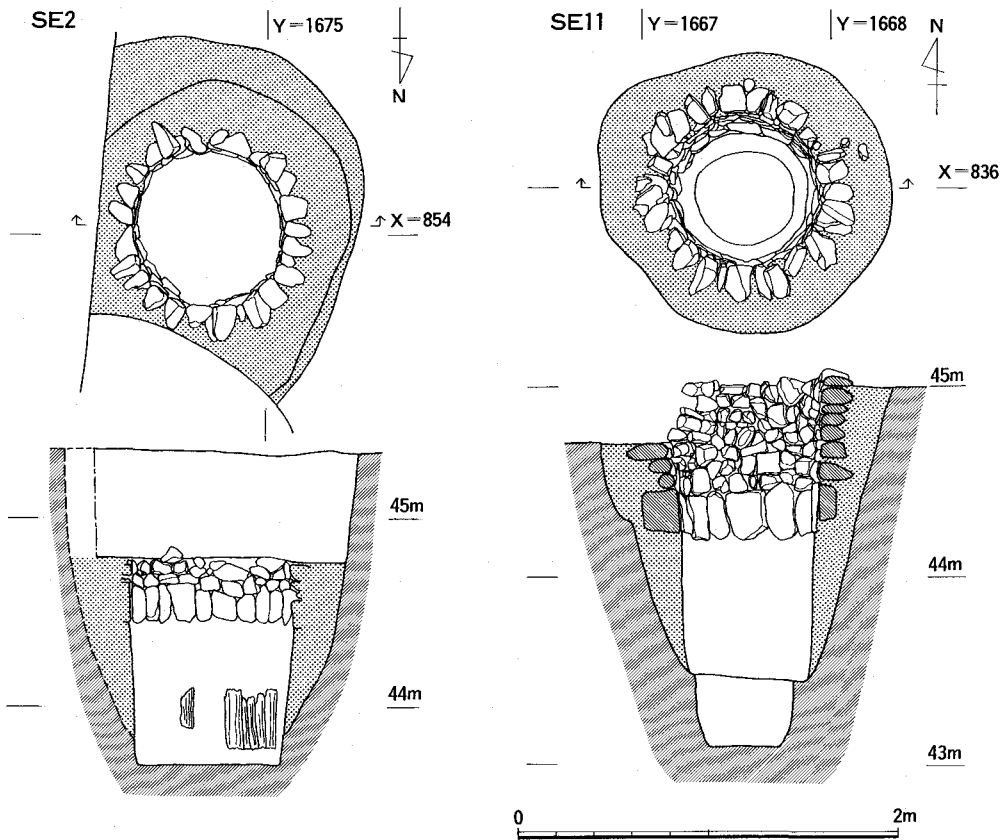


図25 井戸 SE2・SE11 縮尺 1/40

SE22 と SE23, SE25 と SE26～SE28 という組合せが想定できる。切り合い関係にあるものをみると、SE12 と SE14 が新しく、SE15 と SE16・SE17 はそれ以前である。漆喰製の野壺が木桶製のものより新しいことがわかる。肥料は、このような道の傍らの野壺に納められ、井戸の水で希釈して用いられたのであろう。

溝 SD1 と SD7 は、方位を真北から東へ約 2° 振っており、道 SF1 にほぼ平行する。これに対して、SD2・SD8 と SD3～5・SD9 はほぼ直交し、方位を真北から東へ約 7° から 13° 振る。

柱穴は、調査区全域に分布しており、耕作にともなう柵状の施設となろう。東に隣接する 19・30 地点では東西方向の柵列を多数確認しているが〔京大埋文研 81a p. 23〕、本調査区では明確な並びを確認することはできなかった。

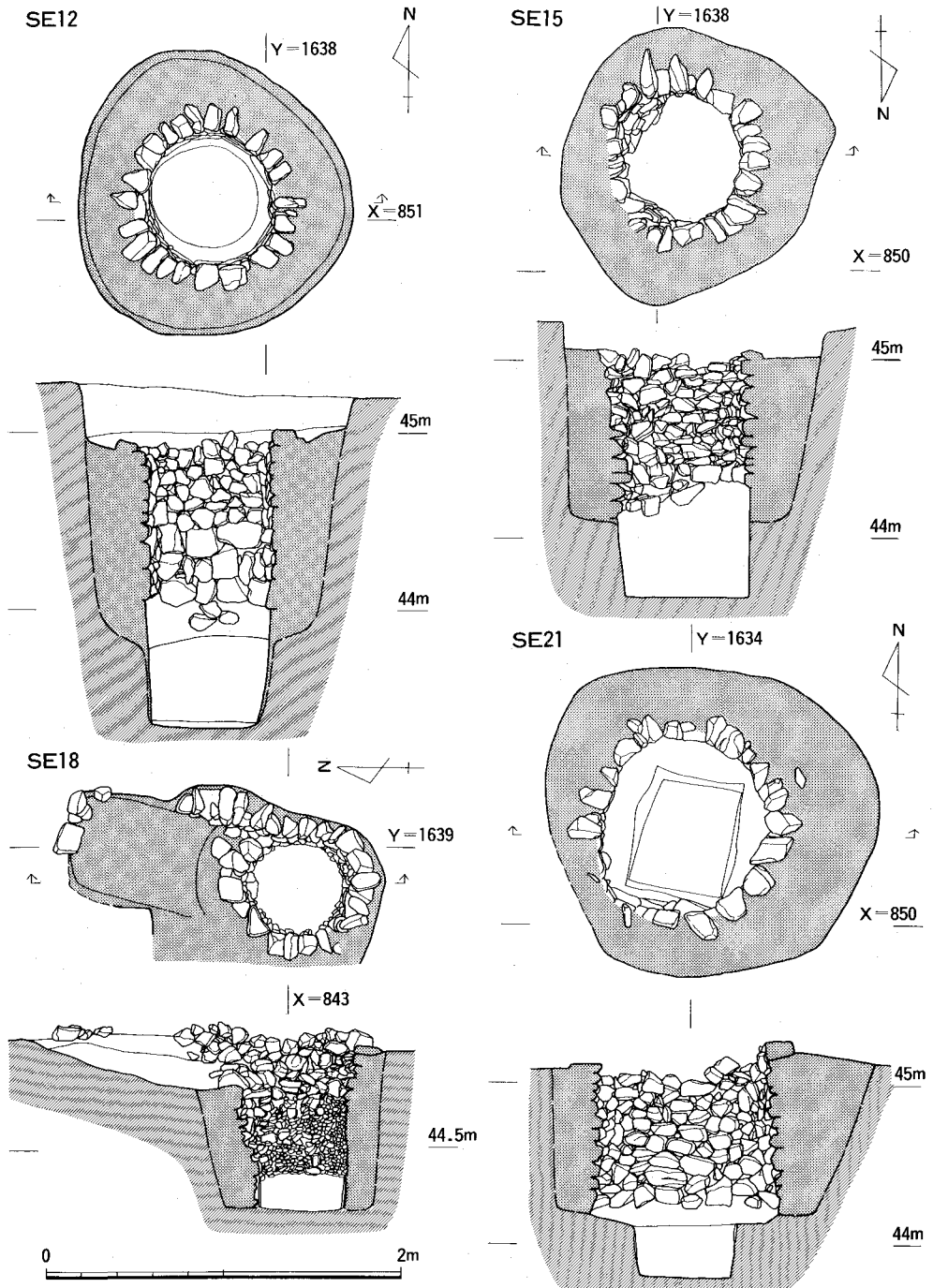


図26 井戸 SE12・SE15・SE18・SE21 縮尺 1/40

4 遺物

本調査区からは整理箱35箱の遺物が出土した。遺物の時期は、中世から近世にわたるが、その大半は、近世後半の土器、陶磁器、瓦、泥面子、伏見人形などであった。ここでは、井戸、野壺より出土した遺物について記述する（図版15・16、図27・28）。

Ⅲ1～Ⅲ13はSE2出土遺物。Ⅲ1～Ⅲ3は土師器皿。Ⅲ3は見込みに圈線をもつ。Ⅲ4は陶器蓋。Ⅲ5は陶器燈明皿。口縁部内面に型抜きによる菊花をはりつける。Ⅲ6～Ⅲ8は染付碗。Ⅲ6は焼継による補修がみられる。Ⅲ8は口縁部が外反する小碗。Ⅲ9は赤絵皿。内外に網目文様を施す。Ⅲ10は染付皿。口縁部を玉縁状に肥厚させる。Ⅲ11は染付仏飯。Ⅲ12は染付蓋。外面全面に草花文をあしらう。Ⅲ13は炮烙。体部外面は、型作りのため、離型材として使われた雲母をふくむ細粒が付着し、粗面を呈する。大阪府枚方市周辺で製作された炮烙である〔難波92 pp. 385-6〕。

Ⅲ14～Ⅲ22はSE1出土遺物。Ⅲ14は土師器皿。Ⅲ15・Ⅲ16は「雛」と呼ばれる小型の土師器皿。Ⅲ17は炮烙。Ⅲ18は口縁部が外反する陶器碗。Ⅲ19・Ⅲ20は染付碗。Ⅲ19は外面に草花文を施す。Ⅲ20は半筒型の碗で、外面に青磁釉をかける。Ⅲ21は染付皿。Ⅲ22は染付蓋。

Ⅲ23～Ⅲ30はSE5出土遺物。Ⅲ23～Ⅲ27は土師器皿。Ⅲ23～Ⅲ26は見込みに圈線をもつ。Ⅲ28は小型の土師器皿。Ⅲ29は陶器碗。Ⅲ30は染付碗。くらわんか碗で樹花文を描く。

Ⅲ31～Ⅲ45はSE4出土遺物。Ⅲ31～Ⅲ33は土師器皿。いずれも見込みに圈線をもつ。Ⅲ34～Ⅲ36は土師器雛。Ⅲ37・Ⅲ38は深草周辺で作られた土師器のデンボである〔難波89 p. 40〕。底部に篋切痕が残る。Ⅲ39は陶器燈明皿。Ⅲ40は陶器燈明受皿。Ⅲ41～Ⅲ44は染付碗。Ⅲ41はコンニャク判で桐花を施している。Ⅲ42は外面に青磁釉を施し、底部見込みに「渦福銘」をもつ。Ⅲ43は口径 14.6 cm をはかる大ぶりの碗で、内外面に草花文を描いている。Ⅲ44は半筒型の碗で、外面に牡丹唐草文を施す。Ⅲ45は染付皿。内面には墨弾きの技法により、蛇行沈線文を配している。

Ⅲ46～Ⅲ48はSE15水溜内出土遺物。Ⅲ46・Ⅲ47は土師器皿。Ⅲ47は見込みに圈線をめぐらす。Ⅲ48は、青磁染付碗。見込みにコンニャク判で五弁花を施す。

Ⅲ49～Ⅲ52はSE17出土遺物。Ⅲ49は土師器皿。見込みに圈線をめぐらす。Ⅲ50は土師器火消壺の蓋。Ⅲ51は陶器燈明受皿。全面に鉄釉をかける。Ⅲ52は染付碗。樹花文を描

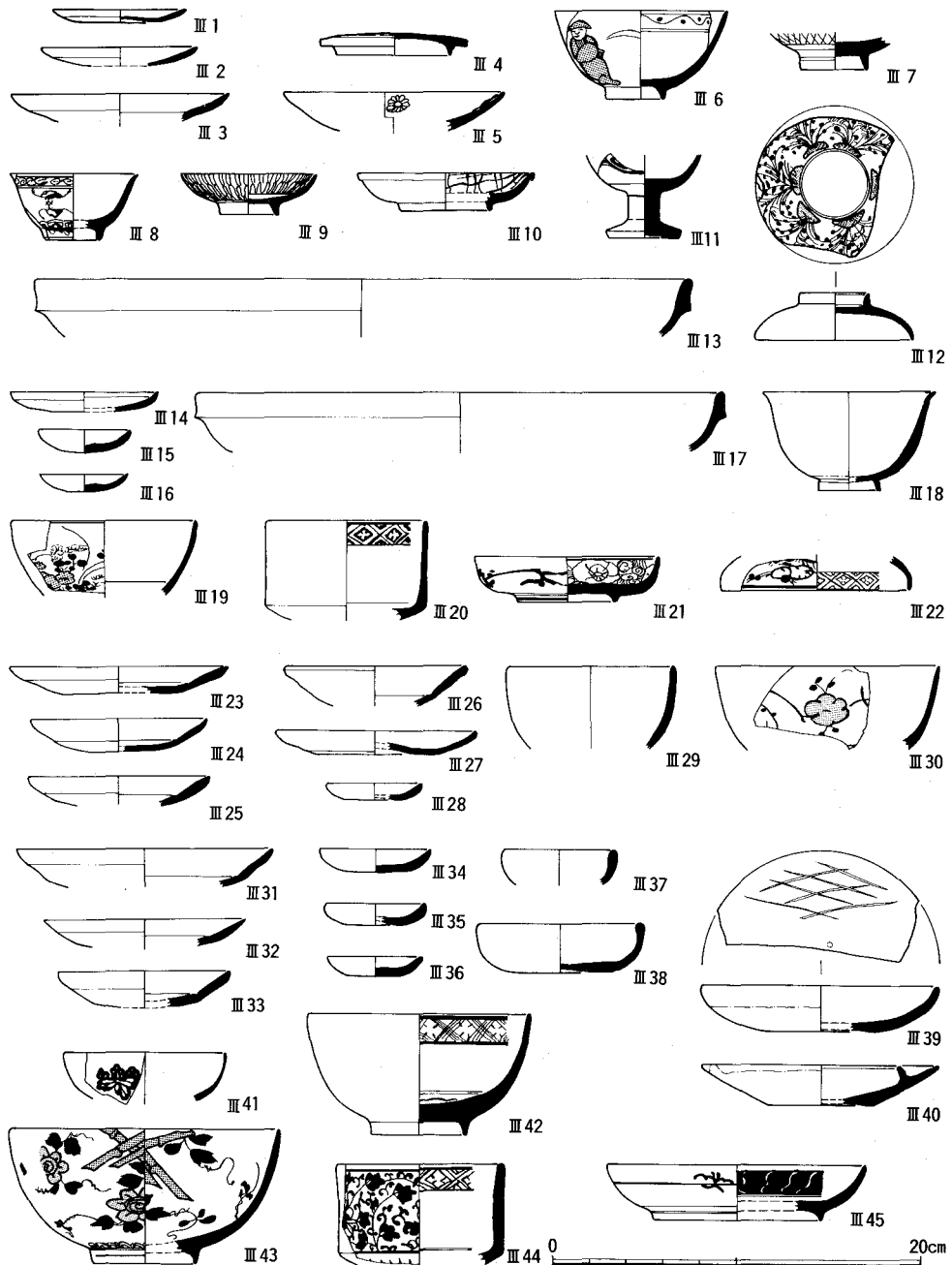


図27 SE2出土遺物 (Ⅲ1～Ⅲ3・Ⅲ13土師器, Ⅲ4・Ⅲ5陶器, Ⅲ6～Ⅲ12染付), SE1出土遺物 (Ⅲ14～Ⅲ17土師器, Ⅲ18陶器, Ⅲ19～Ⅲ22染付), SE5出土遺物 (Ⅲ23～Ⅲ28土師器, Ⅲ29陶器, Ⅲ30染付), SE4出土遺物 (Ⅲ31～Ⅲ38土師器, Ⅲ39・Ⅲ40陶器, Ⅲ41～Ⅲ45染付)



图28 SE15出土遺物 (III 46・III 47土師器, III 48染付), SE17出土遺物 (III 49・III 50土師器, III 51陶器, III 52染付), SE16出土遺物 (III 53~III 60土師器, III 61~III 63陶器, III 64~III 67染付), SE26出土遺物 (III 68土師器, III 69・III 70陶器, III 71染付), SE24出土遺物 (III 72・III 73土師器, III 74~III 76陶器, III 77~III 80染付), SE27出土遺物 (III 81~III 86土師器, III 87・III 88染付), SE22出土遺物 (III 89・III 90土師器, III 91~III 94陶器, III 95・III 96染付)

く、くらわんか碗である。

Ⅲ53～Ⅲ67はSE16出土遺物。Ⅲ53～Ⅲ58は土師器皿。Ⅲ58は見込みに圈線をもつ。Ⅲ59・Ⅲ60は土師器デンプオである。Ⅲ61は陶器燈明皿。Ⅲ62・Ⅲ63は陶器燈明受皿。受部の口縁に、Ⅲ62はV字形、Ⅲ63は弧状の欠き込みをもつ。Ⅲ64は青磁染付碗。Ⅲ65は染付碗で、亀甲文を施す。見込みに五弁花を描く。Ⅲ66は染付仏飯。見込みに五弁花を描く。Ⅲ67は染付蓋。高台内側に「富貴長春」の銘をもつ。

Ⅲ68～Ⅲ71はSE26出土遺物。Ⅲ68は土師器皿。見込みに圈線をもつ。Ⅲ69・Ⅲ70は陶器碗。両例とも灰黄色の釉を全面に施し、Ⅲ69は内面に鉄釉で花をあしらう。Ⅲ71は染付蓋。

Ⅲ72～Ⅲ80はSE24出土遺物。Ⅲ72・Ⅲ73は土師器皿。Ⅲ74は陶器碗。淡緑色の釉をかける。Ⅲ75は陶器燈明受皿。Ⅲ76は陶器蓋。灰黄色の釉をかけ、外面は鉄釉で絵を描く。Ⅲ77～Ⅲ79は染付碗。Ⅲ78は外面に青磁釉をかける。Ⅲ80は染付仏飯。

Ⅲ81～Ⅲ88はSE27出土遺物。Ⅲ81～Ⅲ85は土師器皿。Ⅲ84は見込みに圈線をめぐらす。Ⅲ86はデンプオ。Ⅲ87・Ⅲ88は染付碗。外面に樹花文を描く、くらわんか碗である。

Ⅲ89～Ⅲ96はSE22出土遺物。Ⅲ89・Ⅲ90は土師器皿。Ⅲ91は陶器燈明皿。Ⅲ92は陶器向付の蓋。Ⅲ93は陶器向付。Ⅲ94は陶器ゆきひらの蓋。口縁部を露胎にし、鉄釉をかける。Ⅲ95・Ⅲ96は染付碗。線描きで文様を描く。Ⅲ96は高台が高く、広東碗である。

これらの資料は、18世紀後半から19世紀前半におさまるものであろう。

5 小 結

本調査区周辺では、東に隣接する39地点で古代末の旧高野川系流路の護岸施設がみつかり、その西に位置する調査区一帯の中世から近世にいたる地形環境や土地利用の変遷を明らかにすることが期待されたのである。

調査の結果、下層の茶褐色砂礫からは、少量の摩滅した中世の遺物は出土したものの、遺構は検出されなかった。この茶褐色砂礫は、調査区東半のY=1667付近で段差があり、1段低くなっている西側には黄褐色土の面的な広がり認められた。この黄褐色土からは、時期を特定できる遺物をえることはできなかったが、上層の黒色土と下層の茶褐色砂礫の年代から判断して、近世前半の開発などにかかわるものと推定している。

このように、この地付近は中世の段階では旧高野川系河川の流路内にあたり、不安定な状況にあった。鴨川がほぼ現在の流路に安定したのは近世にはいつてのことであり、近世

後半以降に聖護院村周辺の畑地等として利用されるようになったのであろう。

近世後半の耕作に関わる遺構として、道とその両脇に並ぶ井戸、野壺、溝を検出した。道は、規模が小さく構造も簡単なことから、畑地の間を抜ける小径であったと考える。

道脇に並ぶ野壺は、京都大学構内では、白川道沿いをはじめとして、ほかの地点でも多数発見されており〔岡田・吉野80 pp. 23-6, 五十川・宮本88 pp. 18-19, 五十川ほか92 pp. 22-3, 森下92 pp. 39-40〕, いずれも近世後半以降のものである点が共通している。この頃からこの地一帯が都市近郊農村として、多量の肥料を用いて、商品作物である蔬菜の生産を発展させていったことを物語るものである。肥料の多くは、人糞尿と考えられるが、多量の使用は商品としての流通を生み出しており〔辻72 pp. 602-3〕, 京市中より白川道などの街道を通じて近郊農村へと搬送されたのであろう。このように、近郊農村にとって都市は、単なる消費地ではなく有機肥料を介して生産を支える一翼を担っていたのであり、この点が都市近郊農業の特質ともいえる〔渡辺善83 pp. 341-8〕。

今回の調査で明らかとなった道、井戸、野壺、溝という耕作に関わる遺構群は、こうした都市近郊農業のありようを具体的にみることのできる重要な資料であり、また都市近郊農村である近世聖護院村の景観を復原するうえでも一助となろう。